

## 閑人閑話 三題話～楊露禪・柴五郎・川島芳子～

今年は、“戊辰戦争150年”と言うこともあってか、中公新書から名著『ある明治人の記録』（石光真人編著）が改版出版されましたので、さっそく購入して読了しました。併せて、小説『守城の人』（村上兵衛著・光人社NF文庫）も読んで、あらためて会津出身の名将「柴五郎」の生涯に深い感銘を受けました。

ご承知の方も多いと思いますが、柴五郎【右画像】は会津藩士、御物頭柴佐多蔵の五男で、10歳の時に戊辰戦争に巻き込まれ、家族の内女性（祖母、母、兄嫁、姉、妹）5人はすべて自決、自らは俘虜となると言う過酷な運命に遭遇しますが、その後さまざまな辛苦を乗り越えて陸軍軍人となり、たまたま北京駐在武官の時に義和団事件（1900年）に遭遇します。



西太后の思わぬ変心のため、当時北京にいたイギリス、フランスをはじめとする連合軍8ヶ国の大使館員、各駐在部隊と、義和団に追われてきたキリスト教徒たちは、北京に侵入してきた義和団の猛攻を受けます。彼は、当時の開明派の肅親王第10代善耆に申し出て、彼の王府（言ってみれば高い塀に囲われたお城のような広大な屋敷）を借り受けて、そこにキリスト教徒の難民をはじめ、各、大使館員や家族や各国居留民など、3000人余りを避難させ、また最終的にはここを防衛拠点として、圧倒的に劣悪な戦力・兵力のもとで、徹底的に抗戦して、援軍が到着するまでの2ヶ月の籠城戦をよくしのぎ切ったのです。生来の統率力と、英語、フランス語、中国語の卓越した語学力とで、ともすればばらばらとなる連合軍を見事に統率したのが、柴五郎中佐です。



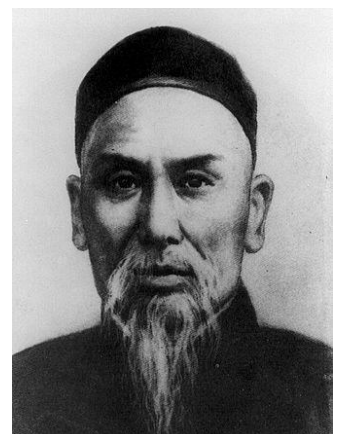
彼の活躍は欧米各国でたいへんな評判となり、イギリスをはじめ各国からいくつもの勲章を受けていますし、彼並びに日本軍に対する信頼が、日英同盟締結へのきっかけともなったとも、言われているくらいです。

ところで、この肅親王善耆の王女の一人が、のちに川島浪速の養女となり、よくも悪くも世界中に名をはせた「川島芳子」【左画像】です。日中戦争終結後ただちに捕えられて、漢奸として処刑されたとされています。

しかし、じつは生かされていて、1955年8月に広島で開催された第1回原水禁世界大会の中国代表団の随員としてひそかに来日して、かつての命の恩人でもある笹川良一と再会したという説もけっこう信憑性がある、これまた、じつに中国的なスケールの大きい！？話です。

また、肅親王善耆の父である第9代肅親王隆勳こそが、楊式太極拳の開祖「楊露禪」【右画像】を召し抱えたその人であるのです。義和団事件は1900年ですから、わずか50年前にはこの邸内に楊露禪が住んでいて、八卦掌の開祖・董海川などと武技を競っていたということです。

まったく無関係に見える3人は意外な運命の糸で結ばれていたのですね。



## 左顧右眄 第22話 『太極拳とは何か(再編集・再掲版)』(第2回)

～趙匡胤の「探馬勢」から太極拳の「高探馬」にいたる軌跡をたどる～

### 6) 宋の名将「楊継業」

もう一度宋代に戻りますが、宋時代の名将「楊継業」の第43代目がほかならぬ故楊名時先生であることはあまりにも有名な話です。宋は北方の騎馬民族国家「遼」(契丹)の侵入に絶えず苦しみますが、その最前線で楊一族は5世代にわたって戦い続けたとされています。現在でも楊家を主題にした京劇はたいへん人気があるそうです。とくに、楊継業の悲劇的な最後を語る「李陵碑」や、楊継業の息子のお嫁さんが大活躍する「楊家女将」など、一度見てみたいと思っています。また北方謙三の「楊家将」は楊一族の活躍を描いたたいへん面白い小説です。おすすめします。

### 7) 「戚継光」の『拳経』

話を進めると、宋は結局蒙古民族に滅ぼされて、「元」となります。元が倒れてふたたび漢民族の国家「明」(1368～1616)が誕生します。漢民族の国家に戻ると必ずあらゆる分野で復古的な動きが盛んになるのは当然です。科挙の制度が復活されましたし、文学の世界では、「水滸伝」「三国志演義」「西遊記」「金瓶梅」などの名著が次々に刊行されました。(この時代には銅活字による大量廉価出版が可能になったためでもあります。) 武術や拳法の世界では、明の武将「戚継光」(1528～1587)【右画像】の業績を忘れることは出来ません。戚継光は当時跋扈していた倭寇(わこう)との戦いでかすかすの武勲を挙げ、また北方の匈奴との戦いでも功績の大きかった武将ですが、兵法についても「紀効新書」という名著を残しています。



その一部がいわゆる「拳経」と称せられる拳法の教則本です。「拳経」には32の拳法の套路(勢)が図解入りで説明されていることでたいへん貴重な文献ですが、近代、さらには現代の拳法への橋渡しをしている意味でもきわめて重要な文献とされています。この「紀効新書」は明代末の兵学者「茅元儀」(1594～1630)が古今の兵学書2000冊を通読し編纂した「武備志」(1621年発刊)にも詳しく紹介されているので、江戸時代の日本にも伝えられて当時の武芸者や学者たちに大きな影響を与えたといわれています。

### 8) 倭寇と日本刀

話はちょっとまたわき道にそれますが、「戚継光」は日本刀にたいへん関心が深く、倭寇の船で手に入れた陰流目録などの研究をして、みずから「辛酉(しんゆう) 刀法」という書も編纂しています。何故かという、彼は倭寇との戦いで日本刀の殺傷力の凄さをイヤというほど見せ付けられていたからだと言われています。またこの時代日本からは大量の日本刀が、足利幕府と明国との間の勘合貿易によって正規に輸入されていた事実がありますし、さらにはこれを真似て「苗刀(みょうとう)」と称する刀が作られるようになっていたそうです。

### 9) 明の滅亡と清の誕生

漢民族国家「明」も歴代の皇帝や官僚たちの数々の愚行、非行によって次第に国土は荒廃し、人口も激減し、暴動や反乱が頻発するようになり、ついには辺境の農民を組織した李自成軍が北京を占領してしまいました。ところが明軍の総指揮官で、50万の軍勢を率いて国境で女真族の軍勢と対峙していた呉三桂将軍が突如女真側に寝返って共同して李自成軍を北京城から放逐して、いとも簡単に女真族が支配する「清」王朝が樹立(1644年)されました。清朝の太祖となったホンタイジ

は明朝の中央官僚や武将などを巧みに登用することによりわずかの女真族が10倍もの人口の漢民族とその版図を支配することに成功したのです。

とはいうもののこれを潔しとしない勢力はさまざまな抵抗運動を繰り広げました。明王朝の皇族唐王を担いで鄭芝龍、鄭成功親子が反乱を起こしたり、呉三桂將軍や他の武将がけっきょくは清朝に反旗を翻したり（三藩の乱）とか平定するまでにはずいぶんと時間が掛かりました。それでもなお漢民族国家の復興を誓って『滅満興漢』あるいは『反清復明』をモットーとする秘密結社がつぎつぎに組織されてひそかに活動を続けて、後の辛亥革命（1911年）へと繋げてゆくのですから、中国人のエネルギーというのは大変なものです。太極拳というものが、このような時代背景のなかで産み出された、ということに留意しながら話を続けてまいります。

### 10) 「戚継光」から「陳王廷」へ

太極拳の起源についてはさまざまな説があることは、最初にお断りしましたが、ここでは主として中国の太極拳の大御所李天驥先生の著書「太極の真髓」や、その甥であるこれも大リーダーの一人李徳印先生の論文「太極拳の変化と発展」（中国太極拳）などを参考にさせていただきます。

太極拳の開祖といわれている「陳王廷」（1601~1680）はまさに明から清に替る激動の時代を生きた武将です。陳家は河南省温県陳家溝に昔移住して来た農民一族でしたが次第に力をつけ、9代目に当たる陳王廷は若くして武拳に合格した逸材で堂々士大夫（しだいふ・いわゆる支配階層）に列するところまで出世していました。

ところで、河南省は黄河の中流域に位置し、古都の鄭州や洛陽などがあるいわゆる“中原の地”と古来から呼ばれてきたところです。鄭州市の西隣りが杜甫の生まれた鞏県（きょうけん）、さらにその西が洛陽です。温県というのは黄河をはさんで鞏県の北側に位置します。また少林寺のある嵩山（すうざん）も河南省です。

陳王廷は先月号でお話した李自成の反乱軍との戦いでも大きな戦功を上げたと言われていますが、明王朝が崩壊（1644年）すると、彼は部隊長の職を辞して故郷の陳家溝へ隠遁してしまいます。まだ40歳そこそこだったと思われませんが、彼の“ただ黄庭一卷を携えて落ち来たり、悶えくるときは拳をつくり、忙来るときは田を耕す”という詩にその心境の一端を読み取ることができます。

“黄庭”というのは道教の養生思想を記した、老子の作と伝えられる「黄庭経」のことです。原本は安祿山の乱で失われ、現存するものは宋時代の臨書で、その原本は、道教に深く帰依していた書聖・王羲之（321~373）とされています。

陳家に伝わる拳譜には、先にご紹介した戚継光の「拳経」にある32勢のうち29勢が取り込まれていること、また陳王廷は少林拳によく通じていたとも言われていることから、部隊長として実戦的な拳技に暁通していたことに間違いは無いでしょう。“立身出世は邯鄲の夢と消え…”と続く詩には彼の無念さがにじみ出ています。陳家の拳は当時は十三勢とか長拳とか呼ばれていたようですが、拳技の工夫は連綿として陳家の子孫に伝えられてゆきます。

【訂正；前月号4頁16行目、「武当山（河南省）」は（湖北省）が正しいので、訂正します。】

## 新連載 一品・一葉・一会

我が家に残るガラクターや、思い出の写真などをご紹介する形で、さまざまな国での出会いや印象などを、語らせていただく欄です。しばらくの間お付き合いください。

### 第2回 古代土器（1974年ごろ・コロンビア・ボゴタで入手）

このころ何回かに分けて、中南米の諸国やカリブ海のジャマイカなどを回りました。当時個人的



な趣味として、超古代文明や、中南米の古代文明に凝っていたので、仕事はともかく、たいへん刺激的な旅が続きました。

この土器【右】はコロンビアの首都ボゴタで、現地の商社の方に頼んで手に入れたものですが、本物か偽物かは保証できませんが、



と言われたものです。

たぶん新しく作られた模造品、つまり、偽物だとは思いますが、アンデス文明の土器に共通した文様と色彩なので、自分なりに満足してずっと飾っているものです。

ボゴタと言えば、有名な「黄金博物館」で見た“黄金のジェット機”【左画像】は、いわゆる“オーパーツ”のひとつとして有名な作品ですが、超古代文明への夢を限りなく広げてくれた素晴らしいものでした。

## 旅をうたい拳を詠む

### 皐月から水無月へ

潔き青年の謝罪見た後の保身の嘘の弁明醜し  
弁明を重ねるごとに映像が

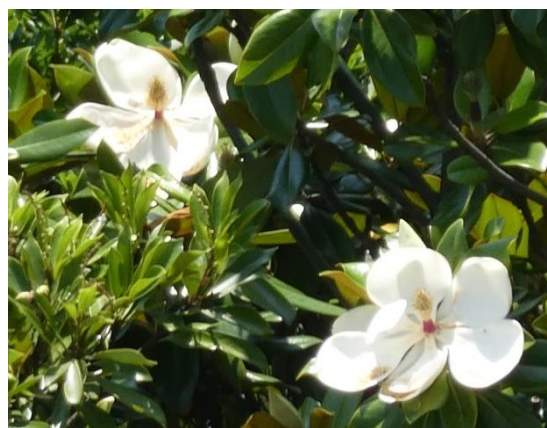
それは嘘だと告げる毎日

1年間モリカケ問題迷走し

闇夜に泥田に行くがごとしか

大輪の泰山木の花咲き継ぐを眼下に楽しむ10階の我が居

【上；泰山木の花】



### 日光の旅

5月末に1泊で日光へ行ってきました

索道で2分登れば目前に華嚴の滝と中禅寺湖あり 【明智平展望台】

竜頭の滝目近に迫る窓際で湯葉そばなどを食むも旅なり 【竜頭の滝】

瀧水のとどろく水際(みぎわ) 紅色のみつばつつじの花震えおり 【〃】

来て見れば石段砂利坂また石段

日光山は山と知る足 【日光山東照宮ほか】

修復の成りて賑わう陽明門

なぜか心に響かぬ輝き 【〃】

壮大な集金マシンと思うほど

山にお金の落ちる日光 【〃】

【写真右；竜頭の滝のみつばつつじ】

